

February
March
2008

浄

monthly
JŌDO

土

合併号

法然上人讃仰会



がくしょうこつ
学生骨になりて

念仏やうしなわんずらん。

「つねに仰せられける御詞」四九三



鬼海弘雄『浄土』2008年年間表紙写真の人

きかいひろお 1945年山形県寒河江市生まれ

法政大学文学部哲学科卒業。山形県職員を辞して、トラック運転手、造船所工員、遠洋マグロ漁船乗組員など様々な職業を経て写真家に。1973年より浅草寺で人物写真を撮りはじめる。

APA賞特選、日本写真協会新人賞、伊奈信男賞、「写真の会」賞受賞。

写真集「PERSONA」で第23回土門拳賞受賞。

写真集

『王たちの肖像：浅草寺境内』矢立出版1987年『India』みすず書房1992年『や・ちまた：王たちの回廊』みすず書房1996年『東京迷路』小学館1999年『印度や月山』白水社1999年『しあわせ：インド大地の子どもたち』福音館2001年『Persona』草思社2003年『べるそな』草思社2005年『In-between8 鬼海弘雄 ポルトガル、マルタ』EU・ジャパンフェスト日本委員会2005年『東京夢譚』草思社2007年『集合住宅物語』みすず書房2004年（撮影・鬼海弘雄 文：植田実）『メッセージ』樹立社2006年（撮影・鬼海弘雄 文：都はるみ）

浄土

2008/2・3月号 目次

「仏教情報センター」を語る	安孫子虔悦	2
法然と親鸞(最終回)	田島 栄	8
会いたい人 すまけいさん②	関 容子	16
響流十方	小村正孝	24
江戸を歩く 第十四回	森 清鑑	28
法然上人とその時代 壇の浦へ	石丸晶子	36
誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	47
編集後記.....		48



表紙題字=中村康隆前浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

仙教情報 センター

を
語
る

仙教情報センター理事長
・
テレフォン相談員

安孫子虔悦

仏教情報センター設立十周年の記念誌に寄せられた、故中村元・東京大学名誉教授の玉稿の一部を紹介します。

「仏さまのおことばが、「如是我聞」^{にょぜがもん}とお経に説かれていとおりに、電話に乗って伝えられますことは、お経にのべられた状景がそのまま現代の極度に発達した文明社会の中に実現されることになります。世の中を明るくして頂くことになります。有難いことです」と激励のお言葉を賜り、決意を新たにしましたものです。その記念誌のタイトルは「如是我聞」でした。本来の意味からは極端に外れてしまいましたが、「人々の生の声を直接聞く」と受け取り、その考えがセンター活動の真髄でもありました。

仏教情報センターは昭和五十八年一月十日に創立し、今年二十五周年を迎えます。バブルが弾け、このころの時代といわれ、僧侶は何をしているのかなどと揶揄され、恥辱の思いがあります。最近でもそれは変わることなく、むしろ加速度をつけた叱咤はすさまじいものです。センターの理念は、精神のよりどころとしての仏教を現代社会に生かすことを目的とし、首都圏在住の伝統仏教九宗派有志僧侶によって立ち上げました。現在百余名の僧侶がボランティアで参加しています。誕生までの苦しみは組織づくりから始まり、順風満帆はさにあらず、産後は継続の新たな困難に遭遇しているのが現状です。当初は、特別で斬新的な仏教活動などと思ってもよらず、縁に結ばれた者同志がこの指止まれと声を上げ、核となり、文京区白山一丁目のビルに事務所を設置し、曹洞宗が舵取り役で船出しました。まぎれもなく、寺や僧侶との関わりが薄れ、仏教の教えに触れることが希薄になった昨今です。菩提寺を持っている方は住職はじめ寺との付き合いがあり、どうにか仏教に触れることができました。しかし、都心においては、五十パーセントを割る菩提寺なしの葬儀執行を見るにつけ、仏事相談、信仰相談は誰に尋ねるのでしょうか。業者指導型、無宗

教の葬儀が増えていることは事実です。
今、センターは次の活動を実践しています。

① 仏教テレフォン相談

② 仏教ホスピスの会

③ 仏教ライフ・サークルの集い

④ 仏教街頭相談

⑤ 講演会・講座の開催と各種団体への講師派遣

⑥ 出版関係 季刊紙『仏教ライフ』、仏教ホスピスの会月報『みちしるべ』、提言リ

ーフレット、既刊行「末尾に掲載」

「仏教テレフォン相談」が活動の中核となり、相談件数は開設日以来十数万件になります。相談内容は「生前に墓を建ててもいいか」「家族だけで葬儀をしたい」「成仏していない先祖がいると言われた」「ご仏前か、ご霊前か」「子供が登校拒否・いじめに合う」「ニート問題」「他人と上手につき合えない」「姑と折り合いが悪い」「夫婦、家庭、子育て」「こころの悩み」などさまざまです。最近仏教書ブームが手伝い、仏教教理・宗派教理質問も増えています。幸福な人の条件は似通っていますが、不幸な人の悩みはさまざまです。仏事・信仰・人生にかかわる悩みや疑問の電話が、毎日寄せられています。相談時間は、午前十時より午後四時まで、土・日・祝祭日は休み。担当相談員は、月曜日臨済宗・曹洞宗、火曜日浄土真宗本願寺派・真宗大谷派、水曜日日蓮宗、木曜日浄土宗、金曜日天台宗・真言宗となっています。

仏教テレフォン相談の内容をまとめた本を数巻発刊し、十万件からの考察のサブタイトルのもと、「葬儀における今日的課題」の講座を開き、同時に相談内容の分類と統計推移

を図式化し発表させていただきました。浄土宗相談員は十六名ですが、一様に相談は疲れると言います。沈んだ声、激しく怒った声、寺に対する苦情が耳なりのようにしばらくは消えません。住職学の実践とはいえ鍛えられ、聞き上手になります。忍耐の何者でもありません。相談員はスペシャリストであるはずもなく、相談マニュアルを手作りし、難解な相談事を交通整理し、専門的相談機関へ振り向けることもあります。幸い、東京都民間相談連絡協議会幹事団体に選任されていますので、お互いに弱点を補っているところです。ここに、仏教相談の実例を上げてみましょう。

①葬儀の手順を知らない不安

1 母の死が近い、父とは離婚しているので墓もない。葬儀のノウハウを知りたい。合祀墓も知りたい。

2 息子の結婚式に義母の葬儀が重なる気配。結婚式の直前に葬式ができたらどうしたらいいのだろうか。

②しきたり・マナーを知らない不安

1 密葬でお香典を上げたが、本葬でもお香典を持ってゆくのか。

2 年賀欠礼の葉書を受け取り、初めて知人の死を知った。どうしたらよいか。

③葬儀費用に対する不安

1 父が亡くなり、菩提寺に葬儀を依頼したら、戒名料とお布施で百万円払うよう言われた。そんなには払えないと言ったら、葬儀にも行かないし、墓にも入れさせないと言われた。どうしたらよいか分からない。借金をしてでも払わないといけないのか。又、今後四十九日忌や一周忌のこともあり本当に困っている。

2 葬儀費用を知りたい。お別れの会の場所や自然葬（散骨）など、それぞれのくら

い費用がかかるのか、また、その方法も知っておきたい。その中で自分に合った方法を考えておきたい。

④寺檀関係のゆらぎ

1 「お別れの会」式で父の葬儀をした。納骨の際、住職は激怒。高額の布施を要求された。

2 住職の品行は知らないが、金銭感覚として布施はじめ諸々の料金、寄付額の大きさに驚く、檀家として一言いいたい。

3 自分が死んだら、子に迷惑をかけたくない。葬儀不要とは言わないが、お布施をはじめ戒名料が心配だ。主人の葬儀のとき寺とトラブルだったので寺への思いはよくない。

これ以上の事例は控えるが、項目分類として家・共同体意識の変様における相談、個人の尊重と血縁・地縁の希薄化、祭祀継承の問題、家の宗教と個人の信仰の矛盾、そして戒名にまつわる問題、更に葬儀後の問題として供養と癒しのあり方、親族間のトラブルなど多岐にわたる相談内容、あなたはどのようにお答えなされますか。誰がために仏事があるのか、儀礼の裏側にあるものを丁寧に説明することが望まれます。

この他、人生・信仰相談と情報提供が相談事業となります。「お寺はこころの相談所」の看板が浄土宗寺院には掲げられています。相談に関わるには、カウンセリングの素養が望まれ、仏教学の応用が試されることは当然なことでしょう。それ以上に肝心なことは話をよく聞くこと、お説教じみた長話をおさえること。そして悩み、悲しみに寄り添うこと、相談者との良い加減を保って無関係を抑えることこそ相談員の最も大切な要素ではないでしょうか。愛の反対は憎しみではなく、距離をおき、関わり合いを断つことだと思います。受話器を置いた際に、これでよかったのかなと反省しきりです。浄土宗新聞に紙

上相談コーナーがあり、相談員が交互に相談をさせていただいておりますが、熟考できる文章の解答より、肉声による訴えは一瞬における真剣勝負の面もあり適った返答ができることもかぎりません。反面、話し相手の立場になる場合もあり、あるお年寄りの方から、息子のこと、嫁のこと、孫のこと、悪口ではなく家族の日常の会話に似たお話があり、食事の時にでも聞いてみればいいのにと申しますと、一人で食事し誰も相手にしてくれないとのこと、長い話が終わると聞いてくれてありがとうと言って相談が終わりました。高齢化、核家族化のありようが伝わります。毎回込み入った難しい相談ばかりではなく、前記のような比較のおだやかな場合もありますが、いずれにしても、仏教離れが進む中、一人一人の心に寄り添った教化の一つにテレフォン相談があるのではないのでしょうか。

もう一つの柱に、ホスピスの会があり「いのちを見つめる集い」として毎月第三木曜日に開催しています。広く仏教の精神を（聞・思・修）し出会いを喜び、ふれ合いを楽しみ、支え合いの手を差しのべ合い、病む者、健やかな者の区別なく共に（生・老・病・死）を語り、見つめ直すことを目的としています。相談員の自坊を会場に、毎月いろいろな分野の方を講師にお招きして、一時間ほどお話をさせていただき、休憩のあと参加者・講師・僧侶による語り合いの場を提供しています。その講演内容をテープ起して『みちしるべ』を発刊し、百六十四号になります。この会に参加者のアフタケアを兼ねて、また会員に広く呼びかけ関東周辺の名刹・古刹を参拝旅行するライフ・サークルの集いを続けています。街頭相談は、アウトドアの開かれた相談に注目が寄せられています。

いずれにしても、各宗派の僧侶の集団、元気ある前向きな方ばかりです。大好きな僧侶仲間、スクラム組んで精進いたしますのでよろしくご指導お願い申し上げます。

既刊本

「仏教テレフォン相談～あなたのお悩みズバリ答えます！～」[講談社]

「仏教ものしり事典」[チャイルド本社]

「仏事・供養110番」[サンマーク出版]

「脳死・臓器移植を考える」[センター出版]

「仏教テレフォン相談実例集」[転法舎]

提言集

「お墓参りの心得」「仏事の心得」「年賀欠礼についての現代的提言」「葬儀のトラブルを防ぐ方法」「靈感商法について」

法然上人鑽仰会

公開講演会

法然と親鸞

脚本家

田島 栄

その
五

最終回

第三幕は親鸞聖人が主役になります。

この劇で描かれる親鸞聖人は、生涯よき師法然上人の御恩を忘れず、念仏を拡めるために北国に東国に三十年近くも努力なされた誠実で人間的魅力に溢れた人です。

そして、親鸞とその仕事を、あたたかくしっかりと支えたのが妻の恵信尼(筑前)でした。

三幕一場は都から約百里も離れた越後の国の荒川の土手です。

冬の来る前に土手を補強しようと大勢の村人の男女が働いています。その中に流罪を受けた親鸞の姿がありました。

突然、雪が降り、はげしい吹雪となっていくます。工事は難航し、慣れない仕事に親鸞はよろめき倒れます。

そのとき、助けをよぶ若い女の声がします。一寸先も見えない吹雪に道を迷った筑前でした。親鸞と筑前は都で別れてから五年ぶりに再び巡り会えたのです。

しっかりと抱き合って変わらぬ愛を誓う二人……。

降りしきる雪の中で二人の描く夢は、夫婦になって都へ帰り、吉水の庵室で法然上人の導きを再びうけることでした。

それから約五年の歳月が流れました。

次の場面は越後の国府近くの草庵です。

親鸞は筑前を妻にし、恵信という法名を与えて、共に田畑を耕しながら仏教の勉強と布教の仕事を怠りなく続けました。流罪の刑も解かれました。

親鸞と恵信尼は京の都を懐かしがります。

法然上人や友と会いたい。でも、「雪国に念仏の華を咲かす」という、恩師との約束は守りたい。揺れ動く心を二人は支えあいます。

今日も雪が降っています。雪にまみれて行き倒れ同然に一人の男が転げこんできました。粥を与えると、むさぼり食い、突然、刀を抜いて「金を出せ」と凄むのです。

むかし六角堂で出会った若者が、今では鶴ねえの五郎太と名の知れた盗賊になり、追われ追われ転々とさまよった末にこの家へ押し込んだのです。

棒や鍬を持った村人たちが集まって来て、こわごわと覗き見をします。

親鸞は「都での知り合いだ」といって五郎太をかばいます。いぶかしがる村人たち……。親鸞は五郎太に蓑を着せてやりながら、念仏をすすめます。「念仏がなにになるんだ」とうそぶく五郎太――。

親鸞は「そなたは淋しくはないか。おれはこの世にたった一人かと淋しさが身にしみたとき、念仏を称えなされ。くり返しくり返し幾度も称えるうちに、心の中があたたかくなる」とさとしします。

去って行く五郎太に、恵信尼が錢袋と小さな薬袋を渡します。村人たちの胸の中があたたかくなり、干柿をやる者さえ出てきます。

都から性信という名の僧が訪れて、法然上人の往生を告げ、門下へのお言葉を記した書状の写しを手渡します。

それは「一枚起請文」でした。

親鸞は声に出して読みます。「もろこし我が朝に、もろもろの智者たちの沙汰し申さるる観念の念にも非ず……」

恵信尼も声を合せて続けます。すると、あの懐しい法然上人の声が聞えてくるのでした。

「たとひ一代の法を能よくよく々学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同おなして、智者のふるまいをせずして、只一向に念仏すべし――」

親鸞は復称します。「只一向に念仏すべし……。お師匠様！」
恵信尼も耐え切れず声をあげて泣きます。

そして親鸞はきっぱりと言います。「法然上人のいらつしやらない都へ帰ったとてなんになるうか。わたしは越後へ残る。そして、北国に蒔いた念仏の種が芽ぶいたら東国へ行く。この国のすみずみまで念仏の声を拡めようとの師の御房との約束を、わたしは生涯をかけて果たさなければならぬ」

それから一年、親鸞聖人と恵信尼の一行は雪解け道を東国へ向かって旅立ちました。
第三幕第三場は稲田の草庵です。

ここで親鸞聖人は、東国の農民や漁師、狩人、商人、木こり、地元の武士や他国から流れてきて荒れ地の開拓や河川の普請をしている人びとなど、幅広い民衆に念仏を拡げていくわけですが、一日一日を生きることには精一杯で、お経も知らず字も読めない民衆の心をどうやってつかんでいったのか。どんな法話をして人びとの胸をゆさぶり、信心をはぐくんでいったのか。私はずいぶん考えさせられました。

そこで、私はなるべく車を使わずに、関東の田んぼや畠の中の道を歩きました。越後にはわざわざ雪の降る日を狙って行き、吹雪の中の河原に坐って七百年前の昔を思いおこしました。

法話を聞きに来る人たちと同化しなければ、同じ立場に立って、相手の気持を理解しようとする努力しなければ、心は通わない。心が通わなければ話は通じないと思いました。

法然上人はどんな無学な人をも決してばかにしませんでした。そのお弟子である親鸞聖人も決して人を見下すような尊大な態度はとらなかつた。むしろどんな相手をも先ず尊敬する謙虚な気持で接した。人間どうしお互いを尊敬し大切に思う心から信頼が生まれる。

私はそう思って、稲田での親鸞聖人の法話の場面を描きました。

恵信尼は野草から薬をつくって村人たちの怪我や病気を治療し、村の女に薬の作り方を教えて、念仏の布教を側面から支えます。

親鸞夫妻と村人たちとのあたたかく和やかな心のふれあいが、凶悪な盗賊の心をも解きほぐします。鶴の五郎太が物蔭から泣きながら飛び出してきたのです。

五郎太は、越後で出会った後も、悪事を重ねて流浪の旅を続けてきましたが、盗みをした後に、人を傷つけた夜に、一人になるとふっと親鸞と恵信尼の顔が浮かび、念仏を呟いたこともある。でも、あれからは人殺しだけはしなかった。「本当だ、本当なんだ!」「さもあるう、わたしは信じる」「おう、信じてくれるか。おれは神も仏も信じない。でも、お前様に命を預ける。どうとでもしてくれい」「わたしを信じるならば、わたしが信じている阿弥陀様を信じなさい。ここにいる方々は、みな御同朋御同行、いわば父母兄弟です。五郎太も仲間に入れて貰いなさい」

恵信尼も口をそえます。「皆様、どうかお願いします。さあ、五郎太……」

五郎太は泣きながら恵信尼のふところへ飛びこみます。

そのとき、空を切り裂く法螺貝の音と共に、数名の山伏が駆けつけて叫びます。「親鸞聖人に告げる。明日より三日の内に板敷山に出向かれよ。修験道と念仏門のいずれが正か邪か、われらが先達・播磨房弁円殿が対決して雌雄を決せん」

三幕四場は板敷山です。

燃えさかる護摩壇の炎の輪の中に、一心に祈祷する山伏たちの姿が浮かび上ります。

先達の弁円は叫びます。「常陸北部のこの地は、古来、わが修験道の聖域である。しかるに親鸞法師が流れ来てより、念仏の声が村むらにこだまし、加持祈祷を尊ぶ者は月日と

共に数をへらす。われらは存亡の危機に立ち至った。よって只今より稲田の草庵へ押しかけ親鸞法師と対決せん」

山伏たちは雄叫びをあげ、すさまじい形相で山を駆け下りて行きます。

三幕五場は稲田の草庵の夜の場面です。

都を追われてから二十七年、東国に来てから約二十年、親鸞夫妻は共に歩んだ日々を振り返り、しみじみと語り合います。

「わたしはね、*「愚にかえれ」*というよき師の言葉がいつもこの耳から離れないのだ。わたしの子供たちは、たとえ人にばかにされてもよい、人をばかにしない人間になってももらいたいと思っているのだよ」「人をばかにしない人間……」

同門の人たちが集まってきました。親鸞聖人は多年の念願であった『教行信証』という著作がようやくまとまったことを告げ、「これもひとえに師の御恩に報いるために書きあらわしたものである」と語ります。

星一つない闇夜の中に、風の音、法螺貝のひびき、雷鳴、稲妻がはしり、山伏の集団が現われます。

親鸞と弁円はいきり立つ味方を制して、一対一で対決します。

浄土門と修験道の火を吐くような激しい問答が交わされていきます。

親鸞は弁円を問い詰めていきます。「弁円殿、今の世のありさまを、人びとの暮らしを、じっと眼をこらしてみつめなされ。生きるために休む暇なく働き、文字さえ学ぶゆとりもない幾百万の人びとは、仏法に縁無き衆生として見捨てられるのか。かれらは皆、地獄へ落ちるさだめなのか……。弁円殿、あなたはそれでいいと言われるのか。真実それでいいと思われるのか。弱き者貧しきものはみな、地獄へ落ちても仕方がないと思われるのか。」

それでよいのか、それでよいのですか！」

最終章は、東国を離れて京の都へ旅立って行く親鸞一行と、別れを惜しむ村人たちや門下の人びとの姿を印象的に描きます。

晴れ渡った初夏の朝、田畑の中の道、親鸞一行の歩みに合せて『歎異抄』の一節が流れます。

「念仏は、まことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業ごうにてやはんべるらん。惣じてもて存知せざるなり。たとい、法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう。法然のおおせまことならば、親鸞がもうすむね、またもって、むなしかるべからずそうろうか。詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。このうえは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々めんめんの御おんはからいなり」

音楽が高まってゆく中で幕がおりていきます。

以上で『法然と親鸞』全三幕が終わります。

私たちがこの劇を通じて皆さま方にお伝えしたいのは、法然上人と親鸞聖人のお二人が、どんなに人間一人一人を大切にされたか、人間のしあわせを願い続けたか。そして、念仏がどんなに人間をはげましたか、生きる力を与えたか、未来への希望を育てたかということでございます。どうかこの劇を御覧になって下さい。

そして御覧になった皆さま方が、法然上人と親鸞聖人のことを語りあい、そこからお寺さんと檀信徒の方々の一層の交流が生まれることを願い、人と人との心をつなぐ劇を一所懸命作ります。劇のテーマは希望です。

なにとぞ皆さま方の御指導とお力添えをお願い申し上げます。

(了)

蓮門小子 コラム 夕焼断章

私たちは東（ひむかし）日の昇る方角）から上った太陽を、西（日のイニシ方）へと見送る。そして夕焼の西空の彼方に極楽浄土を想い願う。私たちの信仰はおおよそ、そういう水平性のなかにある、と考えるとしよう。とすれば、ヨーロッパのゴシック建築の尖塔はまるで天空に突き刺さるようで、彼らの信仰の垂直性を思わせる、ということが出来る。

平山郁夫画伯の『流砂浄土変』はシルクロードを行く隊商を描いた作品だが、まるで永遠の水平を思わせる砂漠の上に広がる空は夕日が沈んだ直後の夕焼け空であり、緋から幾分か淡い朱へと変じていく様子が見てとれる。

北原白秋は「空に真赤な雲のいろ。玻璃に真赤な酒の色。なんでこの身が悲しかろ。空に真赤な雲のいろ」と歌った。中原中也は「落陽は、慈愛の色の 金のいろ」と詠んだ。

島崎藤村は「彩雲や 落つる日や 行く道すがら眺むれば 秋天高き夕まぐれ」堀口大蔵は

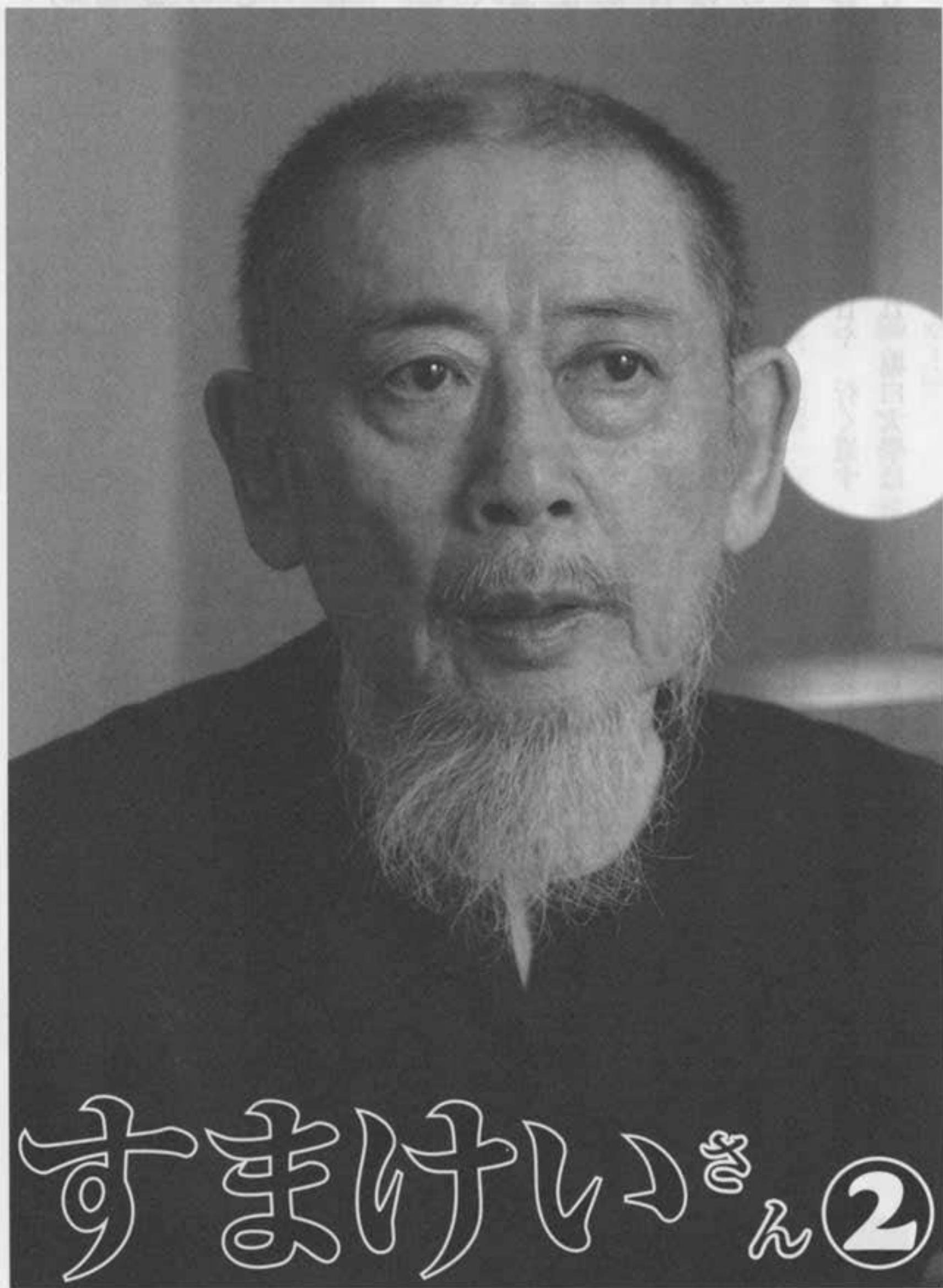
「夕ぐれの時はよい時 かぎりなくやさしいひと時」と繰り返し、長渕剛は「沈む夕日を いくつ数えたらう」と『乾杯』のなかで歌ったのである。

水平線の向こうへ、あるいは山の端へ、私たち日本人はとにかく夕焼にこだわり続ける。

立原道造は「おまへは だまって 背を向けて いる 夕陽のなかに 鳩が 飛んでいる」と恋を想う。「格子戸をくぐりぬけ 見上げる夕焼の空に だれが歌うのか子守唄」は安井かずみの歌詞。「赤い雲ゆく 夕陽の草原」は岩谷時子の「高校三年生」であろうか。童謡唱歌ともなれば数知れず、夕焼が歌われる。「ギンギンキラキラ」「夕空晴れて あきかせふき」「菜の花畠に 入日薄れ」「夕焼小焼のあかとんぼ」「夕焼小焼で日が暮れて」「秋の夕日に照る山紅葉」
ときに哀しく、ときに寂しく、ときに懐かし。私たちは夕焼の空を見る。

連載

会いたい人 関 容子



すまけい^{さん}②

撮影／タカオカ邦彦

すまさんがお茶の水の文化学院に入った理由について語る。

「親父は貧乏して育って苦学生の一ツリだったから、暖房もなく蚊屋の中に新聞紙を貼って寒さを防いだとか、よく苦勞話を聞かされた。それで文科系の學問をしても金にならないから、經濟とか法律とかの方面に俺を進ませたかったんだけどね。文化學院を創立した西村伊作という人は、和歌山の紀伊半島の先の金持ちの息子で、單車に乗って走り回ってた不良の暴走族みたいな人でね、息子が十人とか十一人とかいて、その子たちを入らせるいい學校がこの國にはない、というんで作っちゃったのが文化學院なのよ。元不良だから、自由主義がいいわけよ。あのころ羽仁五郎が創立した池袋の自由學園か、お茶の水の文化學院か、と言われるくらい異端だった。俺、そういうところが好きだったわけ」面接で、受験理由を訊かれただけで合格。

「まあ、誰でも入れたんだよね(笑)。入った

ときから俳優の木村功はこの天井裏の部屋に寝泊りしてた、なんてもう有名人だった。

劇作家の飯沢匡さんもこの出身だしね。戸川秋骨の娘の戸川エマさんがフランス語を教えてたけど、まるで片仮名そのままのジャポニーズ・フランスで、ひどいもんだった。エマさんと若いとき親友だった女優で演出家の長岡輝子さんはこの演劇部の教授で来てましたよ。石原慎太郎さんとか大江健三郎さんも特別講師で来たことがあって、大江さんなんか教壇にピラミッド型に立てたハンカチの先をいじりながらボソボソ言ってるのを俺たちはバカにして見てたんだけど、てめえがよっぽどバカだったのにさ(笑)。ほかにもいろんなすごい人が来たりして、まあ、かつこい學校だった。講義の最中、學生が煙草吸うのも出てくのも自由。ヘンな自由主義なんだ」

そのころ演劇部の學生に誘われて、『卒塔婆小町』(三島由紀夫)に出演したときの写真がある。

「文化学院の中庭で撮った写真。三角の帽子をかぶってるのが俺。チヨイ役の警官で出ただけだけどね」

昭和三十年代の初め、学生アルバイトとして東宝砧撮影所でエキストラをしたことがあった。

「いわゆるガヤ、っていうやつ。半年間だけどね。一日の日当が五百円だった。つらかったのはその間一回も固有名詞で呼ばれなかったこと。おい、そのメガネ、とかだからね。こんな安っぽい仕事してるのを見られるのはヤダな、と思いながら「御用、御用っ」なんてやってた。稲垣浩監督の『国定忠治』で、三船敏郎さんが忠治親分。御用提灯ぶっこわすような荒っぽい斬り方をしてた。子分の板割の浅太郎が夏木陽介で、その背中におんぶされて出てたのが勘九郎（今の勘三郎）坊や。生まれながらのスターで、まだ赤ん坊みたいなもののなに周りにからチャホヤされて、そば



文化学院時代に出演した『卒塔婆小町』（三島由紀夫）のメンバーと。上段中央の帽子をかぶっているのがすまさん

へも寄れなかった」

当時三船敏郎は飲み屋で飲むと、黒沢明監督の悪口を大声で言っていたという。

「ぶっ殺してやる、なんてよく怒鳴ってたよ（笑）。やたら声は大きいけど何言ってるのかハッキリしないし、毛深いしね。毛深いからって威張るんなら、動物みたいに四つ足で歩け、このやる、なんて思ってた見てた」

こういうすまさんの小気味のいい悪態は、噂で聞くそのアングラ時代のアドリブの連発を彷彿させる。

「三船さんは不器用な人だし、バカバカしく男っぽい人だったから、黒沢さんはもつとあの人のおかしさ、滑稽さをあざ笑うようなところを育ててやればよかったのに『天国と地獄』とか『悪いやつほどよく眠る』とか、どんどん重厚な役柄のほうへ持っていった。俺、三船さんは黒沢監督では『七人の侍』だけだと思う。あの三船さんは無類に可愛らしかったよね」

『七人の侍』の三船敏郎は、武家の系図をどこから手に入れて「菊千代」と称している豪快で無邪気で愛嬌のある男を好演していたが、なるほど黒沢作品ではあれが最も愛されるキャラクターの役だったかもしれない。

「晩年の三船さんとはちよつと俺、一緒に映画に出たことがある。山田洋次監督の『男はつらいよ——知床慕情』（昭和六十二年・松竹）って寅さん映画で、北海道の羅臼までロケに行った。三船さんは相変わらずブツキラボーンな獣医の役で、淡路恵子さんに愛の告白がうまくできない。やつと終りごろ、野原のバーベキュー大会で切り出すことになるんだけど、俺は周りでニヤニヤして見ている船長の役で、このとき渥美清さんとも多少からむ芝居があった」

渥美清とはほかに接点はなかったのか。

「井上ひさしさんのこまつ座の公演を新宿の紀伊国屋ホールに観に来てくれたとき、柄本明や佐藤B作と一緒に食事に誘われたことが



芸術劇場時代。堂本正樹演出リサイタル「三原色」
(三島由紀夫)に出演した。右がすまさん、中央が
結城美栄子さん

あつたけど、俺、照れ性だから、用事あるようなこと言つて遠慮しちゃつた。それから程なく亡くなつて、惜しいことしたと思つたね」

すまさんは昭和六十一年、松竹映画五十周年記念として製作された山田洋次監督による『キネマの天地』（中井貴一、松本幸四郎、渥美清ほか）で、三流の通俗映画監督の役を演じ、ブルーリボン賞と日本アカデミー賞の優秀助演男優賞を受けている。

話をまた演劇に戻す。

昭和三十四年ごろ（文化学院は中退していた）、のちにナポレオン・ソロの吹替え声優としても有名になる野沢那智からお互いの友人を通じて誘いがあつた。

「カミユの『カリギュラ』という作品と一緒にやらないか、俺がカリギュラの役をやつていい、自分は大臣の役で出るから、つて誘われた。野沢は國學院の学生だったけど、劇団東童のトップとして存在がもう鳴り響いて

た。中野の上高田一丁目の一軒家を借りて稽古に入つただけで、彼の國學院の学生仲間が途中から演出家として入つてきて、稽古のときにストップかけていろいろ言い出す。学生の演出家なんてものは思いばかりで、言葉もいい加減だからね、ついにどん詰まりになつてきて、バカヤロ、やめた、つていうのを例によつてやつたわけだ（笑）。一か月半も稽古したのにおりちやつて、野沢は今でもずっと俺に借りがあるつもりでいるらしいけどね」

すまさんの「例のバカヤロ、やめた」については、演劇評論家の扇田昭彦氏が「ギョウザライスの役者」と題して書いた文章を引用することにする（『東宝』昭和四十六年九月号）。「（すまけいは）どの俳優の養成所を受験しても落第してしまい、かつて既成の俳優教育を受けたことのない『不運』が、この『名優』をまのあたりにする私たちの『幸運』を生み出した。自分の情熱の噴出を規制しようとす

るすべてのもの（例えば劇団、演出家）を彼は嫌う。アンサンブルということばほど、彼から遠いものはない」

まさに、すまさんはこう書かれる十年以上も前から、規制されることに反発して行動しているのだった。

「やめた」の軌跡をたどってみると、まずは昭和三十五年、「芸術劇場」に入団する。

「セミアマ劇団で、今もありますよ。昼間働いて夜芝居する、っていう連中の集り。若い男の代役で軍隊ものに出ただけでかなり俺うまかったんだと思うな。それから堂本正樹演出の『三原色』（三島由紀夫）という芝居で結城美栄子と草月ホールに出て、この装置をやったのが池田満寿夫。三島さんも観に来たしね」すまさんはここを三年で退団する。

「レパートリー委員会というのに選ばれて、そのころ劇団雲が『動物園物語』を上演して、これは『ヴァージニア・ウルフなんかこわくない』を書いたオールビーの作品だけど、こ

っちも別のやり方で是非やりたい、って出したら蹴られたんで、こういうものを評価しないならやめた、って退団しちゃった」

次に昭和三十八年、「新舞台」を創立する。「前の劇団から出た俺以外の男四、五人にはみんな相手がいて、その女を連れて出たから、総勢十四、五人。旗挙げは演出の兼八善兼さんの希望で、女性の翻訳家が訳したスペインの歴史物の戯曲だったけど、これはあんまり面白くなかった。そのあとずいぶん不条理劇をまともに上演しましたよ。まだベケットが生きていて、ちゃんとお金を払って『ゴドーを待ちながら』もやったし、イヨネスコの『椅子』もやった。そのうちにまたやめるんだね、俺が（笑）。総会開いたときに、今後どういふふうにしていきたいか、という話で、できれば大きな劇場、日生劇場とかへ進出したい、と言うやつがいて、俺はそういうの全然違ってたからね。小さいところで濃密な芝居をやりたいたいから俺、悪いけどやめるわ、ってね」

昭和四十年、ここも退団する。

「それから新宿のピットインというジャズ喫茶の裏の駐車場、外で金網が張ってあるよなところで『ゴドー』の抜粋をやったりした。途中で雨降ってくるとうもり傘持ちながら続けたりね。しかし車の音は全部入ってくるし、こっちの声は反響しないし、やりにくいもんだったねえ。状況劇場の李麗仙さんが観に来てくれて、これじゃ金網越しにただでのぞけるからって、目かくしの紙貼ってくれたり、三百円の入場料じゃあんまり貧乏で気の毒だって、帽子回してくれたりした。それで唐十郎さんとのつきあいができて、状況劇場の『ジョン・シルバー』に客演したりすることになるんだね」

それでいよいよ昭和四十二年ごろ、五年間ほどで「やめた」にはなるものの、観た人たちが今もって熱く語り続ける「すまけいとその仲間」が結成されることになる。

扇田昭彦氏が朝日新聞（昭和四十五年十一

月）に、当時のその熱演ぶりをこんなふうで紹介している。

「新宿、歌舞伎町のアート・ビレッジ。イヨネスコの秀作戯曲『椅子』をすま自らが改作・演出した『コンニチワそしてサヨウナラ』は、普通の新劇団の舞台にのれば、いかにもフランスの不条理劇という趣のこの作品が、彼の手にかかる、テーマは同じながらもとたんにドタバタ漫才調に変ぼうする。すまけいの『老人』は、よれよれのモーニング、しわくちやのネクタイ、顔はサーカスのピエロさながら極彩色に塗りたくり、マンガ的なまん丸いメガネをかけて登場。上演一時間半、登場人物三人きりの芝居だが、その間、すまけいはひっきりなしにしゃべりまくり、だじやれを連発してはふざけちらし、全身汗みどろになるまでエネルギーに動き回る。まるで舞台全体を、自分一人の肉体とことばで埋めつくさずにおくものか、といった勢いだ」

（つづく）

口には経をよみ、身には仏を礼拝らいはいすれども、心には思わじ事のみおもわれて、一時もとどまる事なし。しかればわれらが身をもつて、いかでか生死しょうじをはなるべき。(中略)かなしきかなや、善心はとしどしにしたがいてうすくなり、悪心は日々にしたがいといよいよまさる。

(法然上人「念仏往生要義抄」)

口では経文を拝読し、身ではお仏像を礼拝してはいても、心には思ってはならないことばかり浮かび上がり、一時たりとも止まることがありません。そんな私たちの身のほどでは、生死を繰り返すこの迷いの世界を離れ出ることなど、どうしてできましようか。(中略)ああ、なんと哀しいことでしよう、善事に向かう心は年々に弱くなり、悪事への思いは、目を追って盛んになるばかりです。

拝むということ

編集の仕事に携わっている関係で、各地のお寺を訪問し、仏像や伽藍を撮影する機会が多い。カメラマンを伴って行くこともあれば、単独でうかがって、インタビューと撮影の両方をこなすこともある。

前者の場合には、何を撮るか、アングルはどうするかなど、カメラマンと打ち合わせれば、撮影に関してはだいたい「おまかせ」でいい。ところが、後者の場合はそんな気楽なことは言っていられない。インタビューでの聞き漏らしや聞き違いは、あとで電話などでも解決できようが、撮影はその時だけが勝負。責任重大だ。デジタルカメラを多用することが多くなった近年はかなり楽になったが、それでも被写体と向き合っている間は、緊張が解けない。フィルム時代には、取材を終えてもラボ（現像所）から仕上がってきた写真の出来を確認するまで、心配でならなかった。

などという、知ったふうな講釈の、なんと愚かしいことか――。

ある短いコメントに、寝ぼけた頭をピシッと打たれたような、そんな感じを受けた。

「見るだけで心が洗われ、ピントを合わせるとき震えが止まらなかった」

「巡礼」をテーマに欧州、そして熊野古道を撮影されてきたプロカメラマン南

川三治郎さんが、高野山の多宝塔に祀られている五智如来坐像を撮られたときの感想だ。（『産経新聞』平成十九年十二月十九日朝刊）。筆者には恥ずかしなから、そこまでの経験はない。

なぜだろう、と考えてみた。

ファインダーを覗いているこの自分の目は、心は、どこに向いていたのか。暗い堂内の光線状態など諸状況の確認、それらを勘案しての構図、露出の決定、ピント合わせなど、撮影という行為にばかり心が奪われていたのではなかったか。そのとき自分は、目の前に「仏さま」がいながら、そのことに気付いていなかったのではないか。単なる被写体にしか映っていなかったのではなかったのか。

「震えが止まらなかった」南川氏の、仏像に向き合う姿勢、感性に頭が上がりません。筆者がその仏さまを拝しても、氏と同じ体験ができるか……。

仏像は崇拜対象物か、美術品か、そんなことが言われるときがある。おそらく、結果的にはいずれでもあるだろう。ただ、前者が本来であることを失念してはならない。美術品としての見方は、いまだ「モノ」的見方を脱していない。

以前取材した仏師の、「制作中は足で押さえたりもするが、完成していった

ん魂入れをしていたら、修正したいと思っても触らない」との談が思い起こされる。自分というヒトの手によってこしらえてきた「モノ」に開眼作法が為された刻、それは人格ならぬ仏格を宿した崇拜の対象物と変じ、聖なる輝きを放ち出す。「仏像とは本当に不思議ですね」とも。南川氏のコメントと、どこか線で結ばれているような気がする。

釈尊の生母・麻耶夫人は、死後、天界に生まれていた。あるとき釈尊は、自ら昇天して夫人のもとを訪れ三カ月の間説法した。釈尊の姿が見えなくなったことを嘆き、病にまで罹った篤信の優填王は、巧匠を集め最上の栴檀を材料に、釈尊の姿を模した像を作らせた。（『増一阿含経』巻二十八）

仏像のはじまりとして伝わるこの話を、決してたんなる伝説としてのみ受け止めるべきではない。古人が経典にこの説話を盛り込んだ、その根底に流れる意図に思いを馳せなければ。

この私という存在、この私というありよう。仏像に相對し、拝み、祈るという行為は、実は無意識の中にもそうしたことを顧みている表れであるはずだ。尊容をファインダーから拝していながら、カメラ操作のみに気を取られている自分には、まだまだそれが欠けているということになる。

（小村 正孝）

江戸を歩く

九品仏から目黒へ

第十四回

田園編



大江戸ウォーカー

森 清鑑

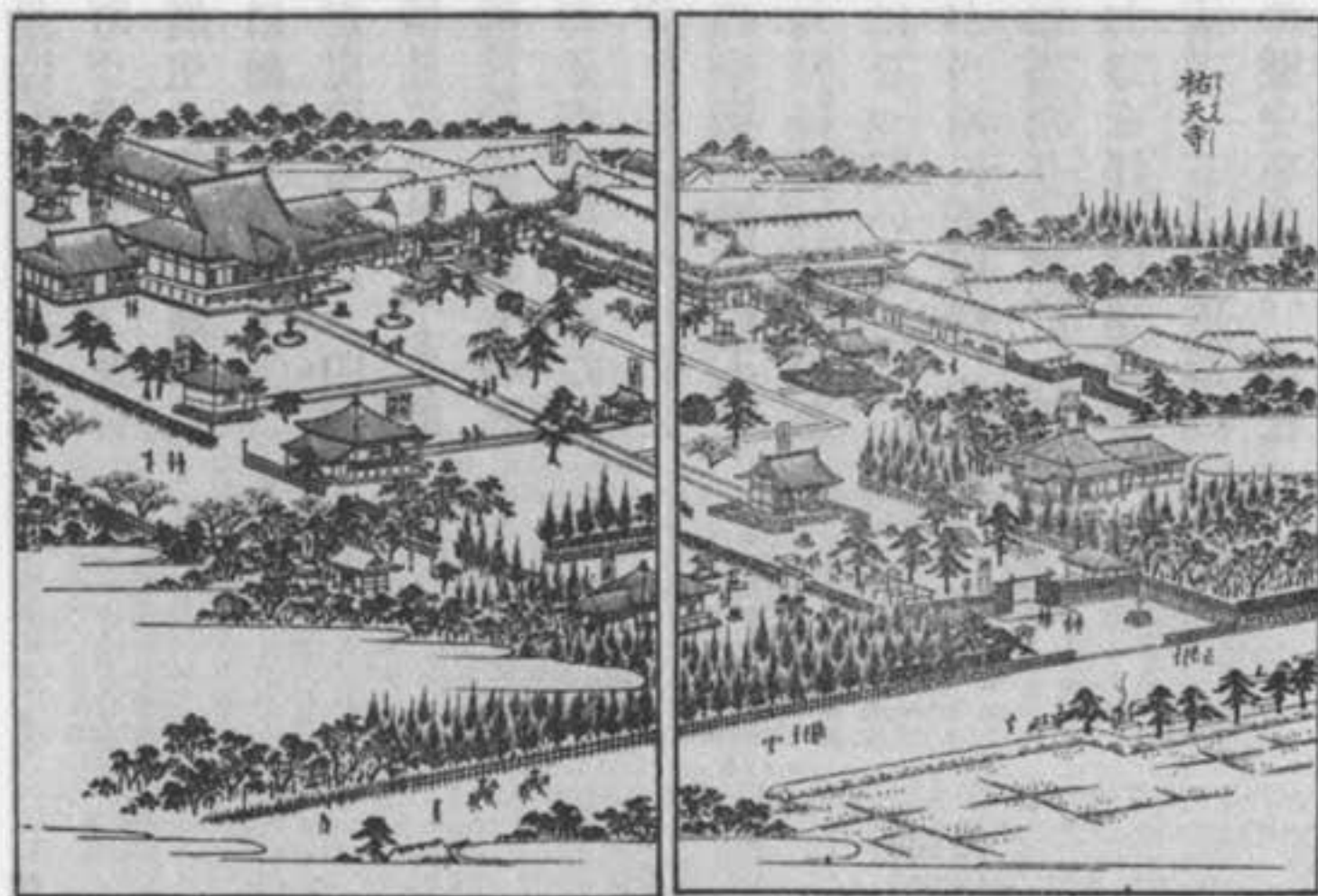
祐天寺

総門を潜ると仁王門。右手に大師堂。そして鐘楼。本堂に向かって進む中程左に阿弥陀堂。門から一直線の奥正面に本堂がでんと控えている。本堂の右周囲一帯には庫裡や方丈が多数連なっている。整然とした伽藍配置は、風格を漂わせる。本堂に向かって左に曲がり、真っ直ぐ行けば広大な墓地。その方向の奥まったところに祐天上人の墓がある。広い。江戸時代の寺領は現在の倍はある。こんもり茂った森はどこからでも目につく。

祐天上人は、江戸前期から中期の高僧。正徳元年（一七一）七十五歳の時、三縁山増上寺第三十六世住職、大僧正。享保三年（一七二八）高弟、祐海上人に「寺院創営、不断念仏修行」を遺言し八十二歳で当地にて入寂。上人の功績は「江戸町火消し」制度の元を創ったことでもある。すなわち、「増上寺消防制」を創設。学生を「いろは四十八文字」に

分け、当時としては非常にユニークな防火体制を作り上げた。このことが八代吉宗公の高い評価を受け、大岡越前守が「江戸町火消し制度」に転用。そのアイデアは現代の消防組織の基となった。上人は奈良大仏殿の再建、鎌倉大仏の修復にも尽力。五代綱吉の命で十八檀林の一つ、大巖寺十五世住職、小石川伝通院十七世住職として綱吉公の実母桂昌院の深い帰依も受けている。高德の人で吉宗公をして「今、真の僧侶は祐天ただ一人であ

◆江戸名所図会中巻 祐天寺



る」と言わしめた。新寺院の建立は幕府の厳しい制約もあり困難な時、弟子祐海上人の大変な努力と將軍吉宗の認可、保護政策を受け、祐天寺が誕生した。仁王門、阿弥陀堂は綱吉の息女松姫の寄進。六代家宣夫人天英院寄進の鐘楼・梵鐘など境内には徳川家縁ゆかりの歴史建造物が多い。

行人坂から白金へ

再び行人坂に戻ろう。行人坂を登り切ると左、権之助坂と交わる（目黒駅前）。そのまま白金台方向に歩く（目黒通り）。江戸時代のこの道は今と異なり、細い。前方を見ると、白金大通、仲町、そして日吉坂へと下っている。その先は麻布、三田、古川である。道の左右に細長く家々が連なる。行人坂上に流れる、三田用水を渡ると永峰町。用水は道の南側を寄り添うように下降する。用水に面して右側一帯は、森伊豆守（兵庫）一万七千坪の屋敷である（屋敷の西側一部は現在の山手線

に被さる）。長峰町は、目黒駅前広場の両側。長峰町に続いて六軒茶屋町。道の北側、進行方向左、町を縫うように誕生八幡社と高福院がある（現在は目黒通りに面している）。

誕生八幡は、太田道灌が文明年間（一四六九―一四八七）に夫人の懐妊に当たり、筑前（福岡）宇美八幡をこの地に勧請したものとされている。無事、男の子が誕生。そこで誕生八幡。以来、安産の守り神として今日まで伝えられている。祭りの季節、地元の人々は当社に集まる。昨今、九月には「目黒のさんま祭り」の盛大な会場になっている。

高福院は、松平讃岐守が当地に下屋敷（現自然教育園）を造営するに当たり、讃岐（香川）の偉人、弘法大師のお寺を江戸に建立するため高野山に要請したもの。したがって、真言宗。由来、三八〇年の歴史を刻む。現在の本堂は天保の改革、水野忠邦の千駄ヶ谷穂田の屋敷内にあったもの。作家長谷川伸、版画家恩地孝四郎が当寺に眠っている。長谷川

伸は、「一本刀土俵入り」、「沓掛時次郎」、「喰の母」など作家・劇作家として著名だが、池波正太郎の師匠としても名高い。境内に入ると目黒駅から二、三分のビル街に、かような静寂たる世界があるのかと思わせる。中庭には柘榴の古木がぼつねんとある。

高福院に隣接する北側が堀出雲守之敏一万石、四千五百坪の屋敷である。現在は権之助坂と分れ、登り車線専用の道路が首都高速にぶつかるまでの広い道が割って入っている。

ここが昭和二十年戦争終結までの海軍大学であった。海大は、戦後、国立予防衛生研究所となったが、建物は旧海大の校舎そのものであった。ごく近年、この校舎も取り壊され、大きなマンションに姿を変えた。目黒に海軍佐官の人達の住まいが多かったのもそのためである。目黒はどちらかといえば海軍村で、例えば、駒沢公園の隣に位置する、現東京医療センターは、元は海軍病院であった。戦後になって、子供の頃、病院の一角に山と積ま

れた具足を見たことがある。

海大では、米国との海戦に備えて、数々の図演が行われた。真珠湾攻撃の図演もここで行われたという。海軍兵学校を卒業し、佐官となった、選りすぐりの人達がここで研修したのである。海兵、海大はほんの一握りの人達が到達できた、当時の超エリートであった。

松平讃岐守下屋敷

高福院、堀出雲守屋敷に隣接し、西側に広大に広がる敷地が松平讃岐守（香川）の下屋敷である。（庭園美術館、自然教育園）。国立博物館所属の自然教育園に入ると、そこは豊富な種類の植物が極めて自然の状態で存在し、こんな風景が都下にあるのかと感嘆する。ここには嘗ての武蔵野の原風景がある。

歩を進めると自然の湿地帯、池。人工的に創られたものではない。様々な生物の楽園である。蝶、虫、鳥類。カワセミも生息している。大蛇のごとくうねり上がった黒松の巨木

が随所にあり、讃岐守下屋敷の面影を残している。池の奥に回り込むと、土塁の跡や古城址の遺構を目にする。白金長者屋敷。一説には応永年間に南朝の国司であった柳下上総助が築いた古城ともいわれる。彼は豊富な銀を所持していたので銀すなわち、しろかね。ここからいつしか白金長者屋敷と人々は呼ぶようになった。白金の地名由来である。それはともかく、そのまま維持されている、良好な土塁跡などから、江戸より遙か以前に城館があったことは間違いない。地理的条件を見ても、目黒川と古川に挟まれ、南は崖の、極めて好適な砦構築の位置にある。室町後期には太田道灌の曾孫が治め、江戸寛文期（一六六四頃）には一時期、増上寺領地となった。その後、讃岐守下屋敷になったのである。

庭園美術館は、旧朝香宮邸である。昭和八年に建てられた邸内は見事と言うしかない、アール・デコ様式のインテリアに満ちあふれている。戦後一時期、迎賓館として使われた。

現在は美術館である。一見に値する。

増上寺下屋敷

讃岐守屋敷の南を走る白金大通（目黒通り）の右側、すなわち五反田方向は急な勾配で下っており、その昔は崖状であった。三田用水はこの勾配を下るように道の右側を走る。屋敷前に妙円寺妙見大菩薩。隣接して三田用水に囲まれるように、突如として広大な寺町（二万三千坪）が展開する。増上寺下屋敷である。戒法寺、正福寺、光取寺、最上寺、本願寺、善長寺、清岸寺。寺領は現在の数倍もある。二代將軍秀忠の正室、崇源院の茶毘は、増上寺裏手の麻布ヶ原我善坊谷付近で行われた（麻布台一丁目付近、霊友会裏手）。崇源院は秀吉の側室、淀殿の妹、お江与の方。徳川將軍家正室の中で茶毘に付されたのは、この方のみである。その一帯が、茶毘の後、増上寺寺領として宛われた。しかし、この地が、その後、將軍家四代綱重の用地となったため、

替え地として上大崎村に移転したのである。当初は、増上寺僧侶の隠居所であり、下屋敷と呼ばれた由縁である。やがて、増上寺子院の諸寺がここに集まってくる。例えば戒法寺は増上寺辺の芝金杉橋近辺にあったが狸穴を経て、元禄の頃、当地に移転した。考えてみると、芝増上寺とこの下屋敷の位置関係は、東西の関係にあり、いざというときには防御ラインとしての備え。政治的な深慮遠謀の知恵が見られるのである。

白金大通に戻り、少し行くと白金台町の家並みに続いて、右手一帯に瑞聖寺の伽藍が広がる。隠元禅師、黄檗宗の江戸における本元である。江戸名所図会に描かれている伽藍配置は、広く、整然としている。寺領の西側は桑原坂である。この坂を挟んで鹿兒島藩、島津斉彬の下屋敷がある（八芳園）。江戸初期には大久保彦左衛門の屋敷。明治になってからは、渋沢喜作の居。大正になって、日立製作所創業者の久原房之助の館になった。彼は



◆増上寺下屋敷 戒法寺あたりの風景

ここの自然をそのまま生かした庭園を作り上げた。大久保彦左衛門が家康から見舞いとして授かり、この地に植えられたと伝えられる、樹齢四百年を超える老松をこよなく愛したという。

正源寺の森を左に見て、日吉坂を下る。下りきった右手に覚林寺がある。加藤清正を祀った寺である。江戸の人々は「清正公さま」と呼び親しんだ。開山は日延上人。朝鮮出兵の際、清正が連れ帰った王子だという。成長し、小湊、誕生寺十八代貫首となり、熊本藩中屋敷の北隅にこの寺を創建した。境内を三田用水の分脈と見られる川が走っている。この川は古川に注ぐ。正面は天神坂。古道はこの川に沿って左に折れる（桜田通り）。右手一帯は広大な細川越中守（熊本）の中屋敷（大石内蔵助切腹の場所）。熊本藩中屋敷が加藤家から細川家に移ったのである。道は細川屋敷の北角から左に入る（高輪消防署先の左に折れる道が江戸時代の道）。すると左側に

立行寺（日蓮宗）がある。大久保彦左衛門の菩提寺。通称、大久保寺。

大久保彦左衛門

赤門を潜って境内に入ると左手、石段を登ったところにお堂があり、中に彦左衛門一族の墓が並んでいる。その右手中央、さらに鞘堂に納められた、ひととき大きな墓が大久保彦左衛門忠教（一五六〇～一六三九）のもの。その裏手に同じく鞘堂に納められた一心太助の小さな墓がある。彦左衛門と一心太助の物語は、鶴屋南北の弟子、河竹黙阿弥が書いた歌舞伎芝居に端を発し、講談、講釈で一躍有名になった。現代でも萬屋錦之介主演の映画でお馴染みである。大久保一族は三河譜代の名門で家康が天下を取るまで数々の戦で戦功を立てた。忠教も例外ではなく、その武勲は著しいものがある。しかし、徳川幕府が確立され、平和な時代になると戦時忠勇の士が必ずしも優遇されたわけではない。忠教は二千

石の旗本として、晩年、「三河物語」の執筆に意を注ぐ。これは子孫のために書かれたもので門外不出のものであったが、そうした三河以来の譜代家臣の不満とともに、幕府成立までの諸事が克明に書かれており、その意味で貴重な文献となっている。忠教自身は出世には無頓着で、常に多くの浪人達を養ってその就職活動に奔走したといわれる。義侠の士と慕われていた。一説には家康臨終の時、「將軍に心得違いがあれば予の名代として意見せよ」と遺言したとか。天下のご意見番と呼ばれる理由である。三代家光は彼を厚遇し、石高を増やそうとしたが固辞したといわれる。彦左衛門の逸話は「大久保武蔵鎧」、「名将言行録」などの書で伝えられている。こうしたことから、義侠に富んだ、多くの物語が創作されていったと思われる。一心太助は、架空の人物とされているが、墓があるところを見ると、後年、造られたか、あるいは彦左衛門の草履取りとして実在していたのではな

いか、との説がある。彦左衛門と同世代の、大久保家系は、石見銀山を開発した大久保長安や小田原城主となった大久保忠世、江戸初期に幕閣として重きをなした、その子の忠隣^{ただちか}を輩出している。

【参考文献】

戒法寺の葉 浄土宗戒法寺刊
江戸明治東京重ね地図

◆一心太助墓



◆大久保彦左衛門墓



法然上人
とその
時代

シリーズ第四章

壇ノ浦へ

第五回

作

石丸晶子

画
アーサ



十三

それから数日後のことである。

屋島に、生け捕られた重衡と引き換えに三種の神器じんぎを都に返せ、という後白河法皇の院宣が届いた。

平家は西海に落ちたとき、安徳天皇とともに三種の神器も奉じていたのである。

平家に擁されて西海に赴かれた安徳天皇たかなりの後には、その異母弟で四歳の四の宮尊成親王が後鳥羽天皇として即位したが、朝廷の伝統にしたがえば、正式に即位するには神璽じんじ、宝剣けん、内侍所ないしどころの三種の神器が必要なのであった。

神璽とは八尺瓊曲玉やさかにのまがたまをいい、玉印である。

宝剣は草薙くさなぎの剣。

内侍所は八咫やたの鏡。

しかし、これらはみな、平家とともに西海にあり、後鳥羽天皇は三種の神器なくして踐せん祚そしたのであった。

朝廷としては、何としてもこの三種の神器

を必要とし、欲していた。

印宣にいう。

「先帝安徳、皇居を出で、西海に行幸。しかる間、三種の神器、西海にうずもれて数年を経る。これもつとも朝廷の嘆き、亡国の基なり。」

なかんずく重衡は東大寺焼失の逆臣たるによつて、すべからく頼朝の願い出のまま死罪に処せらるべきなれども、ひとり平家の一門を離れ、生け捕りとなる。

かかるゆえに、重衡、思いを遥かに遠き屋島に馳はす。哀れなることどもなり。

しかれば、三種の神器ことなく都に返し奉らば、かの重衡においてはすみやかに赦免するものとす」

院宣の使者に立った者は、院御所の召し次ぎ所に伺候して取次ぎなどをする花方という卑官であった。

さらに後白河は、院宣とは別に二位にいの尼あまにも重衡に手紙を書かせ、このほうは重衡が昔

召し使っていた定国という侍に持たせて屋島に遣わした。

重衡は母二位の尼から別して愛された子息であつた。何としても三種の神器が欲しい後白河は、重衡を使つて二位の尼を泣き落とさせようとしたのである。

「重衡、捕われの身となり、今日明日にも首刎ねられ、獄門に懸かるかと思えば、生きた心地もこれなく候。母御前、今一度我を御覧ぜんとしめされ候はば、内侍所の御こと、一門の方々によくよく話させ給え」

手紙にはそう記されていた。二位の尼から一門に話して、院宣にあるように重衡の身柄と三種の神器とを交換するよう、取り計らつてくれ、というのである。

愛し子の文を読^{ふみ}んで、時子は泣いた。からだを震わせて泣き叫んだ。亡き者と一旦はあきらめていたわが子に、突然、生存の可能性が出てきたのである。

十四

手紙を急ぎ巻き戻すと、時子は平家一門の宗主宗盛の前行き、そこに倒れ伏して、掻き口説き泣いた。

「何の仔細がありましようぞ。早々内侍所を朝廷にお返し申し、重衡をお助けください。この世に永らえようと思うのも、子どものためです。わたしを助けようと思ひになれば、どうかどうか、重衡に今一度逢わせてください」

母の哀願に、落ち着きのない様子で宗盛は左右にひかえる一門の人々を振り返った。やがて二つ三つ咳払いをすると宗盛は、
「われらも院宣を今読んだばかりで、はてどうしたものか。重衡は弟なれば、決して粗略には思ひませぬが。内侍所との交換となると、評議せねばなりますまい」

「内大臣はこの母に死ねと仰せか」
時子は叫んだ。

宗盛は口ごもって、

「いや、決して左様なことは夢にも思いませぬが」

「ならば早う早う、内侍所を返されよ」溢れる涙のなかで時子はからだを震わせ、宗盛の膝をはげしく強請りながらいう。

「二位殿」

とその時、傍らにいた時子の弟・平大納言（へいだいなごん）時忠が、

「二位殿、御分別を失うてはなりません。こは平家の大事にござる。今、この屋島にわれらとともにおわす帝（みかど）が御位を保たせ給うと申すは、ひとえに内侍所の御ゆえにございますぞ。これをもし都に返し入れ奉ったならば、帝はなにを抛り所にして御在位されるのであらうぞ」

弟の諫めに時子は肩を震わせた。

時忠は続けて、

「内侍所をお返しするとは、帝をお見捨て申し上げることと同じであること、なぜ、お分

かりになりませぬ。姉上は帝をお見捨てなさるおつもりか」

「……」

「いや、それのみではない」時忠はあたりをきつと睨むと、

「あの策に長けた法皇のことだ。内侍所をお返し申したとて、本三位殿（ほんざんみどの）（重衡）をお返しくださるとは思えぬ。さらにお返し申せば、われらは都の朝廷の賊軍となり、一門を滅ぼすことになること、明らかである」

十五

その時、

「院宣のお使いが来たと聞いて、急ぎ参りましたが」

と知盛が駆け込んできた。

宗盛が宗主であるのに対し、すぐ下の弟知盛は、都落ち以来、平家軍の総指揮にあたる大將軍として、今も屋島に築城中の工事を見回っていたのである。



「如何なる趣きの院宣でありましたか」

宗盛の前に膝を付くと、荒く息をつきながら知盛は急き込んで尋ねた。

「お、中納言殿、お待ち申していた。それがなかなか難しき院宣での」

ホッとした様子で宗盛は弟にいった。

「今、都に生け捕られている重衡を返す代わりに、内侍所を院にお返し申せ、というご命令よ」

「兄上」

知盛はキッと目を上げて宗盛をみた。

「それが何の難しき院宣でございますか。重衡と内侍所とを交換するなど、滅相もないこと。考えるまでもないことでございます。すぐにもお断りの書状をお書きなさらねばなりませんぬ」

「いや、それが……」知盛の言葉に宗盛は困惑の様子で、

「二位殿は交換せよと仰せられる」

「二位殿とは申せ、女人にょにんの身」

知盛は大声を上げると、

「女人には、今この時、政事まつりごとのことも戦のことも分かりませぬ。かかる女人に、兄上は一門の行く末をお任せか」

「しかし二位殿は、重衡に再会できずは死ぬと仰せられる」

「重衡がこと、二位殿には諦めていただくより他はありませぬ。先の合戦で、われらは多くの一門を失いました。生き残った親子兄弟、みなその悲しみに耐えておりますものを、母上とはいえ、二位殿ともあろうお方がひとり重衡の命にこだわりの一門すべての行く末を閉じてしもうてよいものか。誰ひとり、納得する者はおりませぬぞ」

宗盛は頷きながら弟の言葉を聞いていたが、

「そなたの言うことにも一理はあるが、しかし、のうち中納言殿」

と知盛に、

「実は一の谷以来、われらには考えていたこ

とがあつての。かかる折しもこの院宣を受け
たのよ。そして重衡に逢えずは死ぬと仰せら
るる二位殿のお言葉じゃ。で、ようやつと決
心がつき申した」

「何を決心されたのです」

「われらはもう戦には厭きてしもうた。そこ
でこの際、三種の神器と帝、女院、そして二
位殿を都にお帰し申し、源平和睦してこの宗
盛は讃岐一国を貰えば、それでよしとすると
な」

讃岐の守となる見通しがついて、ホツとし
たかのように宗盛はいった。

「血迷われましたか、兄上」

思わず知盛は叫んだ。そこまでこの兄が無
知無能で戦の状況を知らぬ男だとは考えてい
なかった。

「讃岐一国の国守になるなど、夢に過ぎぬで
はござらぬか。かかることが実現するとても
お思いか」

この日頃、潮風にさらされ、干からびた咽
喉から声を振り絞って知盛は怒鳴った。

「一の谷で討ち死にした一門の首を、院と義
経はどう扱ったかお忘れか。市中引き回しの
上、獄門ではござらぬか。院宣にも、重衡が
身、本来なら頼朝の願いのままに死罪に処す
べきと書いてある。内侍所とともに帝と女院
が都に帰られた暁には、頼朝はこのお二人を
も死罪にするかもしれませぬ。また内侍所も
帝も在さぬとなれば、われらは単なる賊軍。
何をもって兄上が讃岐の守などに任せられま
しょうや」

(つづく)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●里

〔特選〕湯冷めして郷里の話聞いており 石原 勝之

「郷里の」とあるから、久々に帰郷したとい
うのではなく、郷里から訪ねて来たか何かだろ
う。一風呂浴びたのはよいが、話に聞き入っ
て座が長引いてしまっているのだ。郷里の話
になると誰だってそうだろう。

〔佳作〕里山に初焼く煙秋夕べ

河合富美枝

磯菊の石垣に咲く海女の里

井村 善也

里芋のぬるつと通る咽動く

増田 信子

●子

〔特選〕眠る子の握りしめいし木の实かな 中島富士子

どんぐりだろうか。小さい子は、何となく
手を握った状態でいることが多いから、眠る
前は分からなかったが、寝入るに従って自然

に開かれて、木の実が一つこぼれ落ちた。かわい
い寝顔まで浮かんでくる。

〔佳作〕 祝事の重なりており子年来る

佐藤 雅子

冬の月片言の子の指を差す

山口 信子

朝ぼらけ駆けゆく子等の息白し

中村 真一

●自由題

〔特選〕冬、茜ハグせし妻の暖かき

山田 至

背を丸めて帰ると、妻が門口に出ていたの
だろう。思わず抱きしめると温みが手に伝わ
ってくる。手と言ってたが、気持ち可言えば
体全体だろう。ほほえましい句になっている。
私にはまねもできないことだが――。

〔佳作〕 かまきりの卵の泡に冬、日々す

金谷 友江

冬の田の起こして黒き土の息

さとうゆう

友待てば青空高く雁渡る

大倉 智子

読者の声

毎月「江戸を歩く」の連載を楽しみにしています。一月号の文章がたまたま自坊の近くを描いていたので、「浄土」を片手に近所を自転車で回ってみました。なるほど現在では道が広くなっているし、自動車が行き交っているし、ビルやマンションが密集しているし、往時の面影はないのですが、それでもスタジイの古木を見つけて感激してしまいました。

江戸時代の「江戸名所図会」や広重の絵で見るとような風景を想像し、楽しくなりました。特におススメは「目黒のサンマ」でおなじみの「爺々が茶屋」付近です。切り通しになっている道路が眼下にあり、その向こうに住宅の屋根が延々と連なっているのですが、その

屋根の替わりに「新富士」や「元富士」の存在を想像し、しばし江戸への郷愁に浸れます。おかげさまで新しい散歩の楽しみを見出すことができて、これからは東京に垣間見える江戸を探してみたいと思っています。

(東京目黒 浄土宗寺院住職)

菩提寺での父の法事の際に、「浄土」を拝見し、思わぬところで俳句結社「南風」主宰の増田河郎子先生のお名前を見出しびっくりしております。十年ほど前、鳥羽や名古屋の句会でお世話になったことがあり、あたたかいお人柄が懐かしく、一度は中断した俳句をまたやってみたくなりました。浄土誌上句会にも投稿いたしたいと思っています。

(東京府中 主婦)

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇〇八年二月二十日

発表・『浄土』二〇〇八年六月号

選者・増田河郎子 (『南風』主宰)

応募方法

● いずれの題とも数の制限はありません。

● 特選各1名・佳作各3名

● 葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内

月刊『浄土』誌上句会係

水棒自由題

兼題

(季語ではありません)

昨年からの会員です。毎月楽しみに拝読いたしております。全国のさまざまな浄土宗寺院の行事など、面白く読んでおります。お寺のことは父母にまかせっきりでしたので、よくわかりませんが、お彼岸やお盆の意味、檀家としての考え方などお教えいただける記事があると嬉しいです。巻末連載のマンガの「さっちゃん」のオバアちゃんが好きです。

(福岡 会社員)

48 かい

さっちゃんはネッ

かまち♡ふろう



編集後記

遠慮無く卒塔婆揺すぶる空つ風 岱潤

今回巻頭にお書き戴いた我孫子上人といっしょに私も、二十数年仏教情報センターのテレホン相談員をさせて戴いている。我孫子上人はふれていらつしやらなかったけれども、ここ一、二年特に多い相談が、うつ病の方、統合失調症の方など、現に病院に掛かっている方からの相談である。

雑誌によれば現在の日本は、一億総うつ状態といわれているようで、皇太子妃から、総理大臣、はたや横綱までがうつ病にかかったといわれているわけで、今や小学生の間までうつ病は蔓延している

とのことだ。

ある相談電話の方が仰っていた。「私はバツイチになつてからずっと一人で生きてきたし、海外も一人ではつぱとアレンジして歩いてきたのに、自分の心が、人に頼りたくてしようがない、赤ちゃん帰りのような気持で満ちあふれてしまうのは、自分でも考えられず驚いています。身体の検査では異常がないのに、感情が生きることにとまどい、現実を受け入れることができずメタメタになつてしまうのはどういうことでしょうか」

五木寛之氏がうつ病に対して、漢字の鬱の字を説明され、鬱を感じる人はエネルギーがあり大きな可能性があるんだと

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

仰っている。しかしこの言葉だけでは彼等に対して何の救いにもならない。
(長)

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
拙 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

浄土

七十四巻二・三月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十九年 一月二十日

発行 平成二十年 二月一日

発行人

佐藤良純

編集人

大室了皓

印刷所 株式会社

シーティイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四 明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

連載

教えと法話

行ぎょう業ごう果か報ほう

行業の果報
無量寿経

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

行動に伴う結果を吟味する者は賢者なり。

アスベストは、公害の発生源として嫌われ物です。しかし、古くは石綿と称して、重要な建築資材でした。断熱、耐火、電気絶縁性に優れたものです。江戸時代の発明家平賀源内は燃えない布「火浣布」を石綿で作りました。「竹取物語」には、かぐや姫から燃えない火鼠の皮衣が欲しいと言われた右大臣が中国商人から大金で買い求めたところ、

ろ、それが贗物で燃えてしまい、姫には近寄れなかった話が載っています。この伝説上の動物の皮衣はアスベストのようです。

アスベストは自然界に少しある貴重品です。それを多量に使用した人間に過ちの根源があります。自然界のものを利用するとき、謙虚に結果を検証する必要があります。

法然上人鑽仰会の



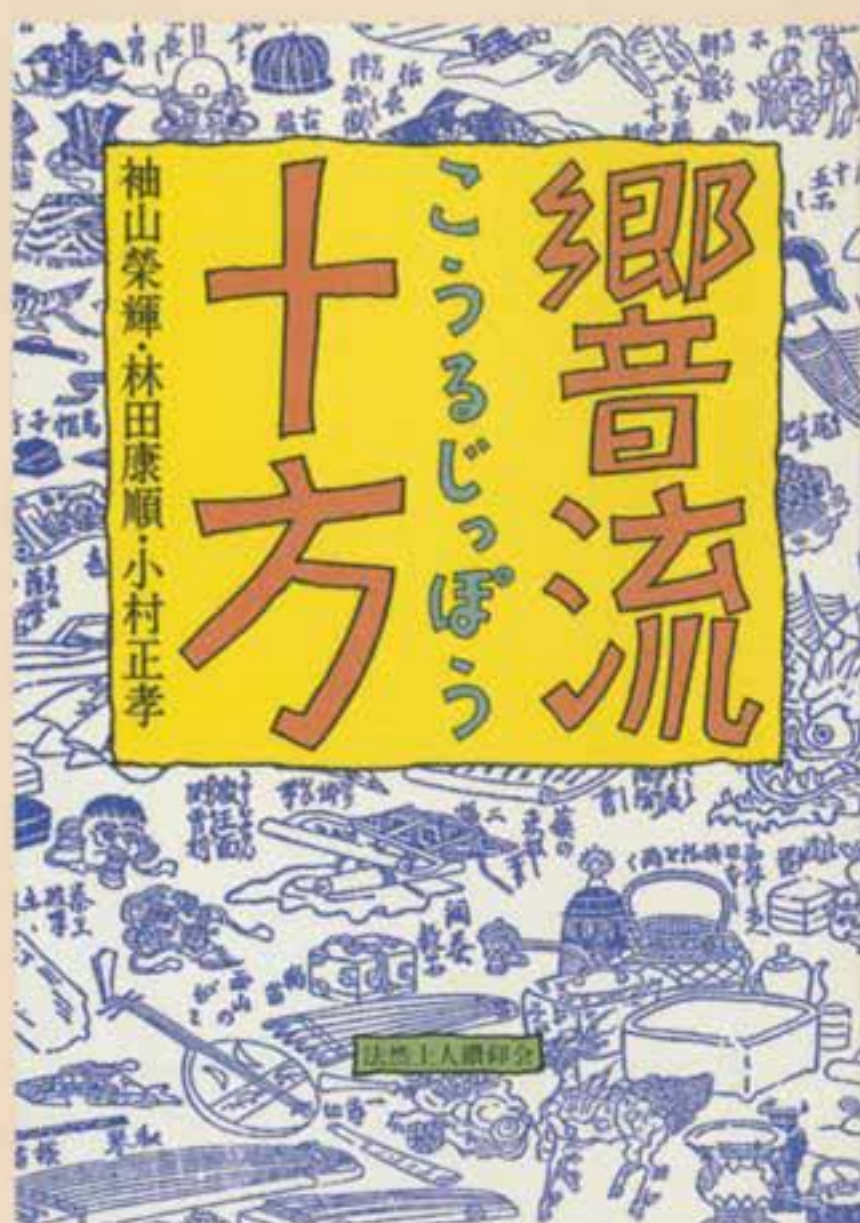
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方ころるじっぽう
600円(税別)

「差出人は法然さん」
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



「念佛讀本」完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
「選擇集絵解き物語」含む
20,000円(別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より